

らいぶ
LIVE 創 REATOR つくりえいたー

NO.27
2005.9.9

研究広報誌

「意味と内容」が
ひろがる学びの創造

互いのまなざしが
共鳴することによって

CONTENTS

- 教育研究会のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1・2・3
- 学習紹介「あそび名人～お年寄りと園児との交流を通して～」(1年 生活科)・・・・ 4
- 学習紹介「へんしーん!新聞紙」(2年 図工科)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 学習紹介「日常生活との関係で科学を学ぶ～電流と回路の学習から～」(4年 理科)・6
- 学習紹介「共に学び、高まる複式学級」(5・6年複式 算数科)・・・・・・・・・・・・ 7
- 学習紹介「地域学習として伝統工芸の学習をする」(4年 社会科)・・・・・・・・ 8

「意味と内容」がひろがる学びの創造
- 互いのまなざしが共鳴することによって -



研究会の開催に当たって

子どもたちが学習の「意味と内容」を獲得し学びの世界を広げ深めるために、私たちは2年間にわたり、子どもどうしが互いに共鳴し響きあう授業づくりに取り組んでまいりました。

当日午前中は、各教室にて、子どもたちが「学習内容(対象)・仲間(人)・自分自身(自己)」と向きあう学習風景と教師側の工夫(アイデア)と技(アート)を見ていただきます。

また、午後からの記念講演では、小松郁夫氏(国立教育政策研究所・研究部長)に諸外国との比較から、わが国の教育改革をはじめ学校・授業改革の見通しについてお話していただきます。きっと元気が生まれる研究会になると期待しておりますので、皆様方のご参集を心からお待ちしております。

学校長 松浦 善満

期 日

平成 1 7 年 1 0 月 2 9

日 程

8:15	8:40	8:55	9:00	9:45	10:00	10:45	11:00	12:30	13:45	14:30	16:00
受付	朝の会	移動	研究授業	移動	研究授業	移動	協議会	昼食	概要発表	講演会	

研究授業 (9 : 0 0 ~ 9 : 4 5)

教科	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
図工	1 C	のびのび ゆらゆら	西井恵美子	中庭
体育	2 A	とびばこあそび	石本 倫章	体育館
国語	2 B	「お手紙」	碓 起代	2 B 教室
算数	3 B	出勤！ 3 B 調査隊「表やグラフに表そう」	宇田 智津	3 B 教室
理科	4 A	ものの温度とかさ	上田 恵	4 A 教室
社会	4 C	「郷土に伝わる願い おまつりを通して」	山崎 立也	4 C 教室
算数	5 A	面積の求め方を考えよう	池田 彦男	5 A 教室
音楽	5 B	曲想を感じ取ろう	江田 司	第 1 音楽室
国語	5 C	「大造じいさんとガン」	須佐 宏	5 C 教室
社会	6 A	世界に歩み出した日本	片桐 宏	6 A 教室
理科	6 C	電流のはたらきをさぐれ！	辻本 和孝	理科室
国語	3・4F	3年「ちいちゃんのかげおくり」 4年「一つの花」	西村 充司	3・4F 教室

研究授業 (1 0 : 0 0 ~ 1 0 : 4 5)

教科	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
生活	1 A	だいすきだよ	辻本 郁夫	1 A 教室
国語	1 B	「くじらぐも」	大谷真喜子	1 B 教室
図工	2 C	ピューン、いってみよう！	北山 成美	2 C 教室
国語	3 A	「ちいちゃんのかげおくり」	志場 俊之	3 A 教室
理科	3 C	めざせ！アインシュタイン 「光のひみつをさぐるう！」	中井 章博	3 C 教室
算数	4 B	～ようこそレストラン 4 B へ “テーブルといすのマジック”～ 「変わり方」	梅本 優子	4 B 教室
理科	4 C	空を見上げると ～月や星～	不野 和哉	理科室
体育	5 A	サッカー	佐々木和哉	運動場
社会	5 B	やっぱり寿司は が勝負!?	田中いずみ	5 B 教室
家庭	6 B	衣服を気持ちよく	藤原ゆうこ	6 B 教室
生活	1・2F	食べ物見聞録 ～活動をとおして考えよう～	松尾 浩一	家庭科室
算数	5・6F	図形 5年「円」 6年「図形のまとめ」	岡田 明彦	5・6F 教室

各協議会 (11:00 ~ 12:30)

教科	場所	協議会テーマ	助言者
国語	5年C組	初発でつかみ、総合的に読む力を育てる ～関連して伝え合うことによる自己変革を意識させながら～	武西 良和 先生 (和歌山市立有功東小校長) 津田 修吾 先生 (美里町立下神野小校長)
社会	6年A組	ひとり学習の充実からまなざしの共有へ	稲井 邦通 先生 (和歌山市立三田小校長) 川本 治雄 先生 (和歌山大学)
算数	4年B組	子どもがつなげる算数科学習 ～思考の相互作用によって～	山崎 光弘 先生 (和歌山市立城北小校長) 佐藤 昌吾 先生 (橋本市教育委員会)
理科	6年C組	「感動」体験を通して、 問題を解決する過程を楽しむ子どもを育てる	中原 徹 先生 (前県科学教育研究会々長) 宮永 健史 先生 (和歌山大学)
生活	1年A組	自分らしさを発揮し主体的に かかわる子どもを育てる生活科の学習	辻 民子 先生 (和歌山市立四箇郷北小校長) 船越 勝 先生 (和歌山大学)
音楽	第1音楽室	「見る・聴く・愛する」力を育てる！	酒井 千佳 先生 (和歌山県教育委員会)
図工	1年C組	もてる力を発揮し、 心地よさを味わう図工科学習	谷澤佐規子 先生 (和歌山市立楠見東小校長) 永守 基樹 先生 (和歌山大学)
家庭	第2音楽室	自らの生活を実感し、工夫する楽しさを 味わう子どもを育てる家庭科学習 ～自分のテーマをもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～	坂本記美子 先生 (和歌山市立雄湊小校長) 今村 律子 先生 (和歌山大学)
体育	5年A組	運動の楽しさを真剣に学ぶには ～機能的特性と子どもからみた特性の関係をさぐる～	三上 滋樹 先生 (和歌山市立貴志南小校長)
複式	ワークルーム	自ら問題意識をもち、 かかわりを深めながら学び合う子どもの育成 ～一人ひとりを大切に、互いにひびき合う授業づくり～	沖 香寿美 先生 (和歌山県教育委員会) 仲垣内 寛 先生 (海南市立大野小校長)

学校提案 (13:45 ~ 14:30)

「意味と内容」がひろがる学びの創造

- 互いのまなざしが共鳴することによって -

研究企画長 石本 倫章

講演 (14:30 ~ 16:00)



演題

「先生の元気が出る学校ルネッサンス」

国立教育政策研究所

教育政策・評価研究部

部長

初等中等教育研究部

部長

小松 郁夫 先生

あそび名人

～お年寄りと園児との交流を通して～



生活科
1年A組担任
辻本 郁夫

今回は多々ある遊びの中から伝承遊びを取り上げ、1年生の子どもが学習過程の主人公となり「遊び」という伝統文化の伝達を行うことを取り上げた実践例である。

“伝承遊び”の学習ではおじいさん、おばあさんをゲストティーチャーとして招待し、遊びを教えてもらう学習展開が多い。また、子どもが園児と交流しながら自分の成長を顧みる学習展開も目にする。今回はこの2つの学習過程をリンクさせた単元を構成した。すなわち、ゲストティーチャーから学んだことを子どもの学びや気付きとして終わるのでなく、この学びや気付きを園児に伝えることにより遊びの幅をふくらませたり、子どもの活動の意識に広がりをもたせたりすることを意図した。

また、それぞれのかかわりの場においても、以下の態度等の定着を試みた。

身に付く態度・気付きなど

《おじいさん・おばあさんとのかかわりの中で》

- ・遊びを知り、遊ぶ楽しさを味わうことを通して、今と昔の文化の違いに気付いたり、工夫して遊んだりするきっかけをつかむことができる。
- ・ゲストティーチャーとして招待した地域のおじいさんやおばあさん方と触れ合うことで、よりよいかかわりの姿を獲得することができる。

《園児とのかかわりの中で》

- ・お兄さんお姉さんという意識を持ち、活動したり相手を受容しながら活動したりすることで相手に対しての思いやりや人とかかわる楽しさなど、年下の子とのかかわり方を試行錯誤する態度を身につける。

実際の活動ではゲストティーチャーとして附属小学校の卒業生のおじいさん・おばあさん方々5名。また、園児として隣接する岡山幼稚園の年長さんにそれぞれ協力していただき学習を行った。

まず、ゲストティーチャーの方々から伝承遊びとして「カンぼっくり」「お手玉」「ゴム跳び」「リング転がし」等を教えていただいた。自分の知らなかった遊びを教えてもらったり、昔からの遊びのこつを教わったりしながら、楽しく遊んだり交流したりできた。

一緒に交流する中で1年生の子どもたちは伝承遊びのおもしろさ、奥深さにのめり込んでいった。さらには、「昔の子どもはこんな遊び道具で楽しんでいたのか。」と今と昔の文化の違いにも気付く子どもが出てきた。



今度はゲストティーチャーとの交流学習

をもとに子どもたちが園児を教える側にまわることになった。「どのように説明すれば分かってもらえるのか。」「こつをどのように教えればいいのか。」等、準備の段階で知恵を出し合い、工夫を凝らしながら遊びという題材を軸に活動の内容にひろがりを持たせていった。

計画を念入りに行い、自分たちの力を試す日がきた。活動の場として岡山幼稚園のプレイルームを提供していただいた。順調にことが運ぶグループ、計画段階の予想とは反して、四苦八苦しながら活動するグループが見られた。「先生、私たちの考えた遊びをやりたくないと言うの。」「せ

かく作ってきたのに壊された。」など予想だにできなかった悩みを訴えにくる子もいた。このような状況に接しながらも意味ある時間を過ごすことができた。

本単元を学習することで今までの生活経験の中で味わうことのできない体験ができたようである。

へんしーん！ 新聞紙



図画工作科
2年C組担任
北山 成美

次は何をつくろうか、もっともっとやってみたい

本実践では、新聞紙にいろいろな表現方法でかかわり、その感触を身体全体で楽しみ、モノを介して空間を身体で感じ、空間に働きかけていくことをねらいとしている。その素材として新聞紙を用いたのは、身近で子どもたちも一度は手にして遊んだ経験もあり、手で簡単にちぎったり、やぶったり、つなげたりすることができるし、丸めたり、折ったりして形をつくるなど扱いやすいからだ。

全7時間の取り組みを3次で計画した。

- 第1次 新聞紙であそぼう！ (3時間)
- 第2次 新聞紙をつなげよう！ (2時間)
- 第3次 新聞紙にはいるう！ (2時間)

第1次 ちぎって紙吹雪にして遊ぶ



第1次では、丸めたり、かたまりにしたり、折ったり、切ったりして何かをつくる子がほとんどだったが、ちぎって紙吹雪にして遊ぶ子どももでてきた。やがて新聞紙の山ができ、新聞プールになったり、布団のようにして寝転がる子どももでてきた。子どもたちは新聞紙の感触を楽しんだり、心地よい空間を発見していったようだ。



第2次 くものすを楽しむ



ふねをつくり、寝転ぶ

第2次では、新聞紙を細く切ってつなげていって、教室をくものす状にしてその下を通ったり、またいだりしながら、気に入った空間をつくっていった。

第3次では、新聞紙を被ってドラえもんに変身したり、虫になりきっている子もいた。

新聞プールに友達ともぐったり、トンネルを何回もくぐったり、基地や家をつくり、新聞紙を媒体としているんな空間を感じることに夢中になっていたようだ。



第3次 ドラえもんに変身



新聞プール気持ちいいな



フラフープを使ってトンネル

日常生活との関係で科学を学ぶ ～電流と回路の学習から～



理科
4年A組担任
上田 恵

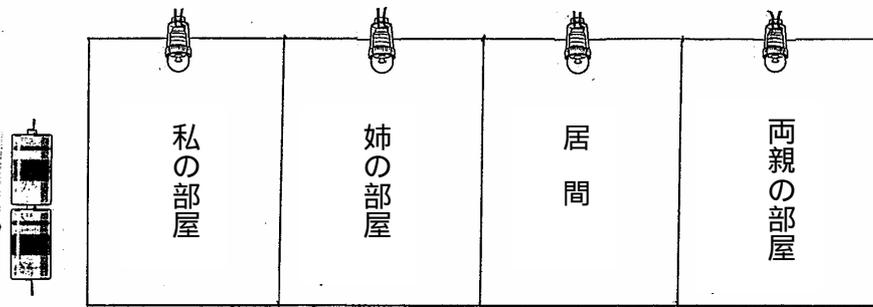
(^o^)生活と科学

未来科学館館長で、宇宙飛行士の毛利衛さんは「科学を自分とどれだけ身近に感じることができるか、日常生活でどれだけ役立っているのか、社会との関係の中で科学を学ぶことが、今の子どもたちの理科嫌いをなくす上で大切だ。」と述べています。

「電流と回路」では、学んだことが生活にどう活用されているか、現実感を持って捉えられる授業作りを心がけました。

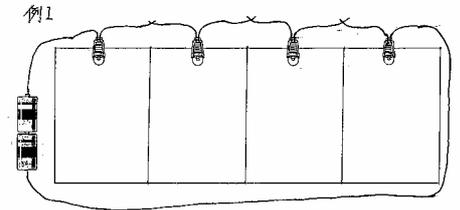
(^o^)ミニチュアの家に明かりを点けよう

さて問題です。下のような家があります。あなたならどうやって全ての部屋に明かりを点けますか？



単元の学習を一通り終え、発展的な学習として、ミニチュアの家に明かりを点ける学習をしました。これは「新しい理科の教科書小学4年」(左巻健男・大野栄三 編著 文一総合出版発行)からヒントを得た教材です。

子どもたちにはまず配線図を書かせましたが、予想通り、ほとんどの子どもが豆電球同士をつないでいく直列つなぎの図を書きました。(例1)



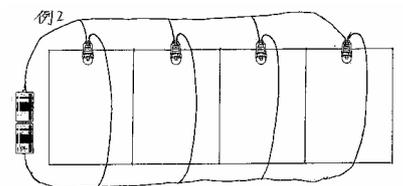
そこで、実際に箱を作り、1グループ4部屋にして配線をさせてみました。

さあ、みんなの前で発表です。あるグループが発表すると歓声が上がりました。なぜでしょう？



格段に明るかったからです。また、1つの部屋の明かりを消しても、ほかの部屋の明かりは消えません。そのグループは、並列つなぎをしていたのです。このグループの1人は「電柱から電気が配られるように考えた。」と言いました。(例2)

乾電池の並列つなぎは、何個つないでも豆電球の明るさは変わらず、あまり利点が無いようにさえ思えます。ですが、実際の家庭配線の多くは並列です。



ほかのグループが皆、自分たちの配線を考え直したのは言うまでもありません。

(^o^)電流と回路

ここでは、いろいろなつなぎ方を工夫して、回路に慣れてほしいということ、また一見どんなに複雑でも、その仕組みは意外と簡単な、部分と部分の組み合わせであることに気づいてほしいという願いがありました。

この後、「階段のスイッチはどうなっているのか考えたい。」という感想も聞かれ、身近な生活に科学の目を向ける視点が芽生えたようだ。



共に学び、高まる 複式学級

5・6年 複式学級 担任 岡田 明彦



複式学級の学び

今年で3年目の複式学級担任。5年生8人・6年生6人。毎日14人の子どもたちのがんばりに驚かされます。

自分で考え、伝えあおうとする学級集団です。
自分たちで学習を進め、学習課題を解決していきます。
同学年・異学年が互いに影響しあい、刺激しあった学びが展開されます。

少人数学級では、一人ひとりが学級内で果たす役割が大きくなります。自分の考えや思いを伝える機会が多くなります。それだけ、考えたりやってみたりして自分を発揮できるということです。この利点を十分生かし、一人ひとりの考えや活動を学級全体で認め合う集団へと高めていきます。



異学年

複式の特性を生かした授業づくりを

少人数



6年生は5年生を意識しながらリーダーとしての自覚を持ち、複式全体のお手本となるよう努力し、学習を深めていけるようになります。5年生は生活や学習の進め方を6年生から教わったり真似たりすることで次第に身につけていきます。上学年・下学年が互いに影響し合ったり刺激しあったりしてうまく機能する学級ができます。

算数科学習で思考力を高める

5・6年複式学級では、算数の授業で学年別指導(直接指導&間接指導)をおこない、相乗的に思考力を高めることに取り組んでいます。課題にぶつかったとき、真剣に追究し解決しようとする姿が見えてきます。話し合う中で解決の糸口を見つけたり新たな気づきが生まれてきます。



算数deゲーム

- ・学習内容をゲーム化する。
- ・既存のゲームを算数的にアレンジする。

子どもたちは、「ゲーム」と聞いただけで目の色が変わり、集中する。苦手な子も算数の舞台へと上げることができる。ゲーム内容はできるだけシンプルにしよう。熱中すると子どもの内なる声が出てくることもある。数理に結びつく生の声である。楽しさを追究しながら、しっかり考えさせることができるゲーム。教師も子どもも楽しもう。



休けい時間も手作りアルゴで勝負

アルゴ

黒白0~11の24枚のカードを使い、相手のカードの数字を当てるゲーム。同学年の間でも5年対6年でも、ひらめきと推理をフルに使って楽しい数理の世界へ。



参加者も熱中!(夏季公開研)

アルゴ公式HP

<http://members.jcom.home.ne.jp/algo-j/>

複式授業研(6/17)・夏季公開研(7/28)へのご参加ありがとうございました。
複式学級を担当されている先生方の悩みや実践の様子をお聞きし、附属の複式(授業)への率直なご意見、ご批評をいただきました。

- ・自主性の育て方
 - ・効果的な直間の授業
 - ・司会や書記の育て方
 - ・異学年交流 などなど
- 皆様から出された宿題を次の研究会に少しでもお見せできる形になればと思っています。

附属小学校研究会 10/29(土)

皆様のご参加をお待ちしています

地域学習として 伝統工芸の学習をする



社会科
4年C組担任
山崎 立也

前回の学習指導要領で伝統工芸(工業)は、5年生の産業学習の中で取り扱われてきた。しかし、今は、3・4年生の社会科の教科書に登場する。3・4年生の社会科は、地域学習が中心である。よって、4年生で伝統工芸を学習する場合(他の学年でも同様であるが)、取り扱うモノが作られていく工程そのものが主となるのではなく、そのモノや工程から見えてくる職人さんの願いや思い、その職人さんに関わる人々の願いや具体的な働きかけに子どもたちが触れて、思いを作っていくことが大切であると考えます。



「和歌山の Japan」(単元名)より

古くから漆器(Japan)を産業とした町は全国にいくつかある。この中から、和歌山の漆器を取り上げたのは、地域学習を意識するからである。昔、和歌山は紀の国(木の国)と呼ばれ、山が多く、森林が多い地域である。本単元では、この和歌山の木を木地にし、あくまで素地を木にこだわる紀州漆器黒江塗りの職人(伝統工芸士 谷岡敏文さん)にスポットを当てることにした。導入時の子どもたちの漆器に対する知識や関心は低く、身近な漆器(椀)を取り上げることから始めた。子どもたちが家庭で食事の時に使っている椀は、素地がプラスチック製のものが多く、職人さんからお借りした木で作られた椀を見て触って、「どのようにして作っているのだろう。」「つるつるしてきれいだな。」など、子どもたちは漆器に反応して、見学に行き作っているところを見たいということになり、見学させていただくことになった。実際に塗る作業も間近で見せていただいた。



見学先で子どもたちが見たり聞いたり感じたりしたことは様々であった。しかし、子どもたちの見学後の共通した思いは、1つの漆器を作り上げるまでの作業の大変さ、それを一人でこなしていく職人さんの凄さであった。子どもたち各々が感じ取ってきた「凄さ」や「仕事の大変さ」をまとめていくことで、職人さんの仕事の全体像を明らかにしていった。その後の子どもたちから、「何百年も続いてきた紀州漆器、伝統工芸士である職人さんが、自分たちの身近(地域)にいることを知って、なんだかうれしい。」という発言があった。このような感想は大切なことであろう。しかし、一方で、後継者問題が提起された。せっかく、自分たちの身近にあるすてきなことを見つけたのに、子どもたちにとっては、暗い話題である。紀州漆器が存続するか否かは、今の社会状況から出てくる問題である。しかし、話し合っても結論は出ない。むしろ子どもたちの目を向けさせる方向は、存続するか否かではなく、存続させようとがんばっている職人さんや地域の人たちである。

紀州漆器のみならず、多くの伝統工芸は多かれ少なかれ同じような状況におかれているのではないだろうか。ここでその伝統工芸を通して、それに関わる人々の願いやそこから見える地域の人たちの努力について考えてみる必要があるのではないだろうか。

From Editors

7月末、各教科別に本校主催の夏季公開研修会を開催しました。たくさんの先生方にご参会いただき、確かな手ごたえを感じました。

秋の研究発表会は土曜日です。ぜひお越しください。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp